

平成 30 年 8 月 4 日現在

機関番号：72601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02922

研究課題名(和文)境界域における古代西アジアの貨幣の流通：3～7世紀のサーサーン朝ペルシアを中心に

研究課題名(英文) Co-existence and transformation of cultures and systems along the boundary in the Ancient Western Asia: Sasanian Persia and its boundary

研究代表者

津村 眞輝子 (Makiko, TSUMURA)

(財)古代オリエント博物館・研究部・研究員

研究者番号：60238128

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：西アジアや中央アジアのように様々な政権が栄枯盛衰した地域で、地域の「境界」(支配領域の接点)または時代の「境界」(政権誕生期または滅亡期)において、どのように文化や制度が共存し、変化していったのかを、広大な西アジアを支配したサーサーン朝ペルシアを核として検証した。西側境界として西側勢力(ローマ帝国、ビザンツ帝国)と東側勢力(アルサケス朝パルティア、サーサーン朝ペルシアなど)との勢力争いの場となったユーフラテス川中流域のシリアに焦点をあてた。東側はサーサーン朝ペルシアと領域周辺(中央アジア、アフガニスタン、中国)における銀貨の利用状況を検証した。

研究成果の概要(英文)：The present study explores how different cultures, political systems and social structures have co-existed, changed or remained unchanged in the marginal zone in the Ancient Western Asia that witnessed the rise and fall of many empires. The present study is a spatio-temporal analysis of the coin and metrology system during the Sasanian Empire and its boundary based on the archaeological data. The study re-examines the archaeological artefacts from the ruins along the Euphrates River in Northern Syria to investigate how the western marginal boundary and the early Sasanian Persian Empire co-existed with powerful empires such as the Rome and Byzantine. The excavated hoards and coins revealed that as the eastern boundary, the Sasanian metrology system and coin currency were accepted for use by the surrounding countries or the later governments as well.

研究分野：東西交流史

キーワード：東西交流 境界域 貨幣 シリア サーサーン朝ペルシア ローマ 度量衡制度

1. 研究開始当初の背景

(1) 古代の西アジアや中央アジアのように、様々な政権が栄枯盛衰した地域では、時代や地域の境界線を明確に引くことはできず、幅をもつ「境界域」が発生する。この境界域では文化や制度がどのように共存し、変化していったのか。または変化しなかったのか。

(2) 本研究では、特に3～7世紀に西アジア全土にわたる大帝國を築いたサーサーン朝ペルシアに焦点をあて、その「境界域」における上記の様相を考察することにあつた。ここでの「境界域」とは、地域としての「境界」（支配領域の接点）だけでなく、時代の「境界」（政権誕生期または滅亡期）をも意味する。サーサーン朝ペルシアの帝国内、最盛期ではなく、領域の東西、開始期と終了期という「境界域」に注目することが、本研究の特色である。

(3) 特に遠距離に移動する貨幣や支配者ごとに異なる度量衡制度は境界域において複雑となるはずである。研究代表者は、平成24年度発足基盤研究C一般（研究代表者）の助成をうけ「出土資料調査からみたサーサーン式銀貨の流通実態の研究」を実施した。この研究でサーサーン朝ペルシアが発行した銀貨が初期イスラーム時代において領域の東側（中央アジア、アフガニスタン、インド、中国西域）で活用され続けた状況を検証した。ここでの境界域は、地域としてはサーサーン朝ペルシアの東側としての中央アジア、アフガニスタン、インド、中国西域であり、時代の境界域は、サーサーン朝ペルシアと初期イスラーム政権との交代期（7世紀半ば）であった。

(4) 本研究では、前研究が対象としていた地域と時代を広げることを目指した。すなわち、西側領域（シリア、トルコ、エジプト方面）およびサーサーン朝ペルシアが領域を拡大しはじめる王朝確立期（3世紀）を新たに対象に加えた。

(5) また、出土資料を主たる対象とすることも特色である。特にコインの場合、従来のコイン研究が図像・銘文解析に焦点をあててきたのに対し、出土分布や出土状況等の考古学的検討をすることで得られた情報をもとに考察することをめざした。

2. 研究の目的

(1) 上記1で述べたように、本研究の目的は西アジアや中央アジアのように様々な政権が栄枯盛衰した地域で、地域の「境界」（支配領域の接点）または時代の「境界」（政権誕生期または滅亡期）において、どのように文化や制度が共存し、変化していったのか。特に国境域を越えて移動する貨幣や境界域においてこそ複雑となる度量衡制度に注目し、出土資料をもとに検証することにある。(2) 時代の境界域として、サーサーン朝ペルシアが西アジアから西方にむけて勢力を拡大していった3世紀半ばを一つの焦点とする。東西の境界域であったユーフラテス川に流域において、西側勢力（ローマ帝国、ビザンツ帝国）あるいは東側勢力（アルサケス朝パルティア、サーサーン朝ペルシア）の文化や制度がどのような形で地に浸透しているかを、出土資料から再構築する。

(3) サーサーン朝ペルシアがイスラーム政権にとって変わられる時期に、既に確立していたサーサーン朝ペルシアの貨幣制度がどのように周辺諸国および後続政権に影響を与えたかを、東西の境界域から出土するコインをもとに再構築する。

3. 研究の方法

(1) 西側境界域としては、ユーフラテス川中流域のシリアに焦点をあてた。この地域はサーサーン朝ペルシアとローマ帝国だけでなく、東西の勢力争いに巻き込まれつつこの地域に勢力を伸ばしたパルミラやオスロエネといった都市、王国の興亡の場である。この地域での文化、制度の共存、変容の実態を浮き彫りにする。

具体的には、代表者が所属する古代オリエント博物館が1970年代に発掘調査を実施し、出土遺物の一部を所蔵している北シリアのルメイラ・ミ初ルフェ地域の出土遺跡の再検討、出土遺物の再調査を進めた。この地域は遺構や遺物の出土状況からローマ帝国とサーサーン朝ペルシアが接点をもった場所と推測している。他地域の出土資料とも比較検討しながら、この地域における多文化の共存、貨幣制度や度量衡制度の導入の実態を明らかにすることをめざした。

(2) 東側境界域、王朝滅亡期としてのサーサーン朝ペルシアについては、継続してサー

サーサーン朝ペルシアのコインの出土例、活用例を報告書等からデータを収集して検証するとともに、国内外の博物館美術館に所蔵されているコインの調査を進めた。

具体的には、5～8世紀のサーサーン式銀貨（サーサーン朝ペルシア銀貨およびアラブ・サーサーン銀貨）にみられる後刻印（コインの端に刻印される約1cmの小さな刻印）のデータを収集分類することで、後刻印の刻印者、刻印された地域、時代の解明を進める。それにより、サーサーン式銀貨の本国以外での利用のされ方、後刻印を押す側の政治背景の実態に迫ることをめざした。

4. 研究成果

(1) 上記の研究の方法(1)で示した1974～80年に発掘調査されたユーフラテス川中流域、北シリアの遺跡および出土資料の再調査、再検討から得られた成果は次の通りである。

1) テル・ミシヨルフェ・ハッジ・アリ・イッサ（略:テル・ミシヨルフェ）から出土した298枚の一括出土貨幣はシリア属州発行の4ドラクマ銀貨であり、総枚数を換算するとローマ兵士2年分の報酬にもあたる。これに加えて、出土資料の中にローマ帝国のラテン語銘入り分銅を「再発見」した(図2)。この2点および出土状況等から、砦が少なくとも3世紀半ばにおいてローマ側の拠点であった可能性を導いた。出土した分銅はローマの一般的な分銅ではなく、入れ子式のカップウェイトと呼ばれる分銅で、移動、運搬を意識した形状である(図3)。ヨーロッパのローマ辺境から出土例を持つ点が重要であり、辺境地域における度量衡制度や文化の受け入れ方を検証する好資料となった。

2) ユーフラテス川中流域がサーサーン朝ペルシアの領域内に入ったことを確認すべく、

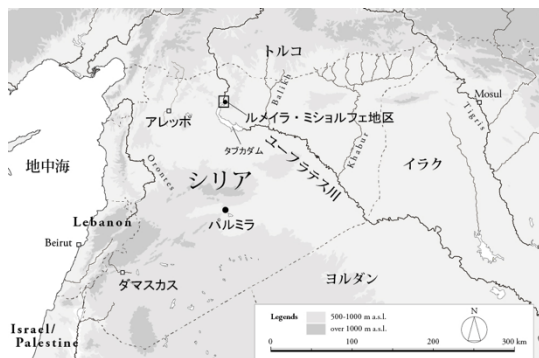


図1 ユーフラテス川中流域、ルメイラ・ミシヨルフェ地区 津村 2017: 図1 を改変

砦が破棄された時期と背景について、文献資料も加えて検討した。一括出土のローマコインの組成の比較検討およびイランに残る『ナグシェ・ロスタムのシャープフル1世碑文』等の碑文資料との照合から、砦がユーフラテス川沿いに地中海方面に支配領域を広げたサーサーン朝ペルシアによって破壊された可能性を示唆した。しかし、周辺にその影響が見られる遺物や遺構は殆どなく、サーサーン朝ペルシアの西側境界域への文化や制度の影響は一過性である可能性が示された。

3) 一方、砦で出土したローマコインと同種のもので周辺の墓から出土している。そこで、ユーフラテス川中流域の埋葬施設の再検討を進めた。この地域には複雑な構造を持つ地下式墓、岩盤を掘り込んだだけの横穴墓、ストーンサークルを持つ墳墓、霊廟と推測される石造建築物など、ローマ時代からビザンツ時代にかけての多種類の埋葬施設が点在しており、支配者層、地元層、一時的な滞在者など、埋葬施設も複雑に混在していたと考えている。盗掘や河川の氾濫による浸水被害を受けたものが多く、コインの出土例についての統計的な分析が不可能であったため、出土数の多いランプに注目した。個々の墓から出土するランプの年代、墓の構造・年代、類別などを分類し、地域を俯瞰することを目指した。中でも盗掘を免れた地下式横穴墓(E-2号墓)から出土した58点の土製ランプを分類した結果、5～8世紀の大きく4種の型式があるランプであることが判明した(図4)。同様の型式を持つランプはユーフラテス川中流域から出土している。また、半円アーチ状の棺床を持つ地下式横穴墓はトルコ、イスラエル、シリアの後期ローマ・ビザンツ時代に



図2 北シリア、テル・ミシヨルフェ出土ローマの分銅(カップウェイト)



図3 オーストリア、フェルトキルヒェン出土のカップウェイト

あり、例えばユーフラテス川左岸の Tell As-Sin (シリア北東部デリゾール県)の墓域では、墓の構造および副葬品(ランプ、装身具、台付ガラス杯、土製浅鉢、把手付壺等)にも強い類似性があり、同じ埋葬習慣を持つ集団である可能性が示された。すなわち、ローマ・ビザンツ色の強い類似の地下墓がユーフラテス川沿いに点在することから、境界としての川が人やモノ、文化の移動に大きな役割を果たしたことを再確認した。被葬者についての総合的な考察は今後の課題となった。

(2) 以上の西側境界域に対し、上記研究の方法(2)で示した東側の「境界」の調査としては、サーサーン朝ペルシアの銀貨が領域周辺(中央アジア、アフガニスタン、中国)から出土するだけでなく、模倣されたり、加工されたりする状況を出土資料および国内外の資料調査から検証した。

1) 5~8世紀のサーサーン式銀貨にみられる後刻印については、代表者の従来の研究で、コインに付加された擦痕(裏面の傷)の有無や表現(彫刻技術)などを、新たな分類基準として加えて、後刻印を再分類できることが提示されている(図5)。これをもとに現存する世界中のごく刻印のデータ収集、分類を進めた。

2) 後刻印は現在収集したデータにより約60種類の図柄を確認することができた。図柄・シンボルを検討するなかで、特にイラン系神話の「シムルグ」として分類される有翼四肢

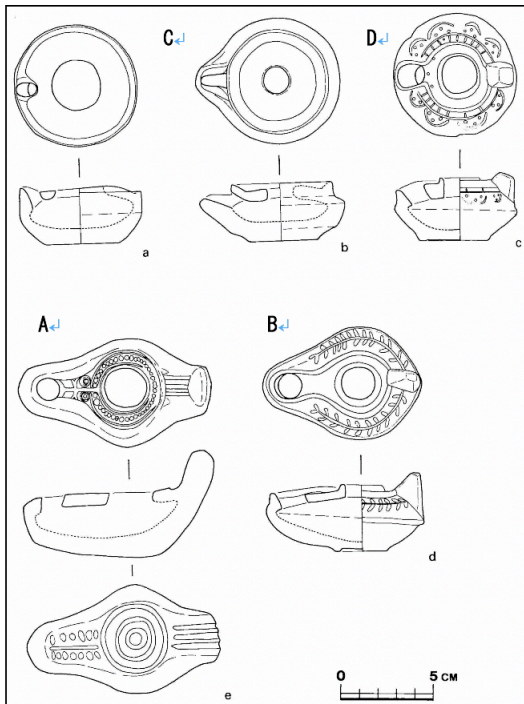


図4 E2号墓出土のランプ分類①

動物に焦点をあて、表現、擦痕の有無、文字銘等で再分類した(図6)。例えば、データ数が多い「口から粒(真珠)を落とす」というシムルグの図は、一時期のエフタル系コインに王の肖像とともに表わされている。これを擦痕という新分類基準から見ると、エフタルの紋章を示す後刻印と同様の擦痕を持つことが示され、この後刻印についてはエフタル系民族が関与している可能性が高い。また、後刻印のシムルグの表現は、初期にはサーサーン美術に多い犬頭であるが、時代が下がると中央アジアの美術に多い駱駝頭と判断できるものも多くなり、「シムルグ」として一括りにはできない今後の課題を提示した。

3) 7~8世紀の初期イスラーム時代に押されたと推測される後刻印は、それ以前のものに比べて圧倒的に種類が増え、銘の言語も多様化する点が明らかとなった。すなわち、サーサーン朝ペルシアの境界域においては、その貨幣制度が多なる影響を与えたが、特に時代の「境界」(滅亡期)である初期イスラーム時代にこの状況が顕著である。これはサーサーン式銀貨の信用度の高さを示すと同時に、大国の信用を利用せざるを得ないという刻印



図5 サーサーン朝銀貨の表面に刻印された後刻印(写真左の右下)と裏面の擦痕(写真右の左下)

1		シムルグ 円	18	S貨/AS貨	AH63=682年	なし
3		シムルグ 円	140	S貨/AS貨	AH64=683年	なし
7		シムルグ・銘 円	16	S貨/AS貨	AH67=686年	なし
10		シムルグ・銘 円	31	S貨/AS貨	AH60=679年	擦痕あり ◎
11A (T6)		シムルグ 円	106	S貨/AS貨	AH66=685年	擦痕あり ◎
12		ラクダ 橋円	8	S貨/AS貨	AH69=688年	なし
N1		シムルグ/ソ 名長路 橋円	104	S貨/AS貨	AH70=689年	なし

図6 サーサーン式銀貨の後刻印におけるシムルグ

する側の脆弱さをも示す。この時代に地域としての境界域に弱体の政治的権力が乱立し、サーサーン朝や初期イスラーム政権が発行した既存の銀貨を自国貨幣として代用した可能性が考えられる。

(3) 内外の西方コインの調査を進める中で、日本の沖縄から出土したコインがローマ帝国およびオスマン帝国のコインであるという結果を示した。流入経路など未確定の部分も多いが、西アジア、中央アジアだけでなく、インド、東南アジアにも広がっていたローマ帝国の貨幣が日本からも出土したことは、今後さらにグローバルな視点での研究の必要性を示した。

以上の成果で得た新知見については研究会や学会などで報告するとともに、一般向けの講演等で広く紹介した。具体的には、平塚市中央公民館市民大学講座(2017年4月20日、2016年5月12日)、古代オリエント博物館オリ博講演会(2017年8月11日、2017年8月26日)、島根県立古代出雲歴史博物館(2017年8月20日)、大阪府立弥生文化博物館(2018年2月3日)、横浜ユーラシア文化館(2018年2月17日)等で、ユーフラテス川流域の出土資料の紹介や、サーサーン朝ペルシアの境界域における銀貨の利用のされ方などをテーマにした講演を実施し、一般の方向けの雑誌やカタログなどにも記事を掲載した。また、西側の埋葬文化を伝える資料の一つとしてルメイラ地区の地下墓出土のランプを展示する特別展覧会を企画し、紹介した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計7件)

Makiko TSUMURA 2018 "Re-discovery' of a Roman Weight Cup from Tell Mishrifat Hajj Ali Issa in Northern Syria", Bulletin of Ancient Orient Museum, XXXV (in print).

津村眞輝子 2017 「北シリア、ユーフラテス川中流域の墓から出土したランプ」『第24回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』59-69頁
2017年12月

津村眞輝子 2017 「ササン朝ペルシアのコイン」『華麗なるササン王朝—正倉院宝物の源流—』天理大学附属天理参考館 2017年9月

津村眞輝子 2017 「古代オリエントの銀」『石見銀山展銀が世界を変えた』32頁、186-188頁、

島根県立出雲歴史博物館・石見銀山資料館
2017年7月

津村眞輝子 2016 「北シリア、ユーフラテス川中流域のヘレニズム～ローマ・ビザンツ時代の埋葬施設」『第23回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』59-69頁

津村眞輝子 2016 「サーサーン朝ペルシアとその境界域のコイン」『ORIENTE』53号 4-9頁

津村眞輝子 2016 「コインのなかの文字」『世界の文字の物語—ユーラシア 文字のかたち—』古代オリエント博物館・大阪府立弥生文化博物館

[学会発表] (計7件)

津村眞輝子 「北シリア、ユーフラテス川中流域の墓から出土したランプ」第24回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会 (於：金沢大学)
2017年7月8日

津村眞輝子 「古代ペルシアの銀事情」第17回イラン考古学セミナー (於：イラン・イスラーム共和国大使館) 2017年10月14日

津村眞輝子 「北シリア、ユーフラテス川中流域のローマ・ビザンツ時代の埋葬施設」日本オリエント学会第59回大会 (於：東京大学)
2017年10月29日

津村眞輝子 「北シリア、ユーフラテス川中流域のヘレニズム～ローマ・ビザンツ時代の埋葬施設」第23回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会 (於：金沢大学) 2016年7月2日

津村眞輝子 「北シリアにおけるローマとサーサーン朝ペルシアの境界域：テル・ミシヨルフエ遺跡出土資料からの考察」日本オリエント学会第58回大会 (於：慶應義塾大学) 2016年11月13日

津村眞輝子 「北シリア、ユーフラテス川中流域のローマの境界域-テル・ミシヨルフエ・ハッジ・アリ・イッサの資料をもとに」日本西アジア考古学会第20回大会 (於：名古屋大学) 2015年6月14日

津村眞輝子 「サーサーン式銀貨の後刻印にみられるシンボル」日本オリエント学会第57回大会 (於：北海道大学) 2015年10月18日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

津村 眞輝子 (TSUMURA, Makiko)

古代オリエント博物館 研究員

研究者番号：60238128